

2022年10月9日（日）主日朝礼拝説教

『そして、子供の手を取って』 井上隆晶牧師  
詩編16篇7～11節、マルコ福音書5章22～36節

### ①【命が流れ出ていってしまう病気】

会堂長ヤイロの12歳になる娘が臨終の床にいました。彼はイエス様の元に走りまわりました。「わたしの幼い娘が死にそうです。どうか、おいでになって手を置いてやってください。そうすれば、娘は助かり、生きるでしょう。」(5:23) そこでイエス様はヤイロと一緒に出かけられ、大勢の群衆も共について来ました。

その群衆の中に12年間出血の止まらない女の人がいました。彼女は今まで多くの医者に見てもらいましたが、ますます悪くなるだけで、癒されず、全財産を使い果たしてしまいました。旧約聖書に「**血は命である**」(レビ17:11)と書かれていますから、命が流れ出ていってしまう病気と考えるなら、これは必ず死ぬという定めを持った私たち全人類を象徴していると言えましょう。このような病気の人は汚れていると言われ、人混みに出ることは禁じられていました。しかし彼女は勇気を出して群衆の中に紛れ込みます。「**この方の服にでも触れればいやしていただける**」(28節)と思ったからです。この勇気はいったいどこから来たのでしょうか。彼女にはもう何も残っていなかったからだと思います。すべてを失った人は、キリストにのみ期待をかけるようになります。詩編の中に「**主は、すべてを喪失した者の祈りを顧み、その祈りを侮られませんでした。**」(詩編102:18)という言葉があります。一度すべてを失う、落ちるところまで落ちることが信仰には必要です。すべてを失えば人は自然に委ねられるようになります。神に委ねることしか残っていないからです。

### ②【信仰とはキリストに触れること】

彼女がキリストの服に触れた時、出血が完全に止まり病気が癒されたことを体で感じました。イエス様に触れることは永遠の命に触れることです。永遠の命に触れた時、死の流出は終わり、命が始まります。ここでは「**触れる**」という言葉が5回(27、28、30、31、32)も繰り返されています。信仰とはキリストに触れることです。「**イエスは自分の内から力が出て行ったことに気づいた**」(30節)とあるように、キリストに触れた人は、主の力が自分の中に入って来るのが分かります。み言葉を本当に信じた時、聖餐のパンとぶどう酒をいただいた時、私たちはキリストに触れるのです。だから元気になります。

イエス様は「**わたしの服に触れたのは誰か**」(30節)と言われました。弟子たちが「群衆が押し合っているのです」と言っても、イエス様は触れた人を見つけようとされます。これはわざとされたのです。女の人は進み出てすべてを告白すると、イエス様は「**娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。**」

…」(34 節)と言われました。彼女はもう癒されていましてから、イエス様も黙ってその場を立ち去ることもできたのです。しかし主は彼女の信仰告白を求められました。病気の癒しだけでは人は救われないのです。心が神に向き、キリストを信じた時、本当の救いはやってきます。神が求めるのは《神との交わり》が回復することだからです。

### ③【ただ信じなさい】

この間、ヤイロは気が気ではなかったでしょう。その時です。「御嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」(35 節)という知らせが入りました。生きている間ならまだ希望もあります。しかしすべてが終わりました。でもイエス様は「その話をそばで聞いて『恐れることはない。ただ信じなさい。』と会堂長にいわれ」(36 節)ました。英語では「But when Jesus heard this message ,he said to the president of the synagogue, ”Now don't afraid ,just go on believing!”」です。「御嬢さんは亡くなりました。もう、先生を煩わすには及ばないでしょう。」というの「一つのメッセージ」なんです。しかし主は、もう一つのメッセージを宣言します。「恐れることはない。ただ信じなさい。」です。一つ目のメッセージは「死という現実を見ろ」というものです。現実私たちの希望を打ち砕くには十分です。「キリストがいても何の役にも立たないでしょう」というものです。もう一つのメッセージは「ただ信じなさい」というものです。あなたはどちらのメッセージを信じますか？

イエス様はヤイロに「恐れることはない。ただ信じなさい」と言われました。「恐れる」という言葉には「心や目を反らす」という意味があります。神から目や心を反らすのです。反対に「信じる」というのは、神に目を合わせ、神の言葉に心を向けることです。ペトロが海の上を歩いた時の事を思い出して下さい。彼がキリストに目を会わせていた時は沈まなかったのに、周りの風と音が耳に入り、主から目を反らした時、波に沈んでしまいました。「ただ信じなさい。」は、原典ギリシャ語では「ただ信仰を持ち続けなさい」です。信仰は継続しなければなりません。点では駄目です。線にならねば弱いです。信仰は 1 日しかもちません。神の前に立ち続け、神と交わりを続けなければなりません。そうすれば信仰は向こうからやってきます。「良い贈り物、完全な賜物はみな、上から、光の源である御父からくる」(ヤコブ 1 : 17) からです。

### ④【娘よ、起きなさい】

イエス様は家の中に入り人々に言われました。「なぜ、泣き騒ぐのか。子供は死んだのではない。眠っているのだ」(39 節) 信じようとしないう者はイエス様をあざ笑いますが、主が言っておられるのです。「死んだのではない。眠っているのだ」謹んでこの言葉を聞きましょう。これはあなたに言っているのです。「あなたは死んではない、眠っているだけだ」。主は子供のいる所へ入って行かれます。それ

はあなたの心の中の聖所です。この少女とはあなたの中に眠っている神の像と似姿です。そして子供の手を取って「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい。」(41節)と言われます。すると少女はすぐに起き上がって、歩き出しました。

●沼野尚美さんは宝塚市立病院緩和ケア病棟（ホスピス）に勤務されているチャプレンです。彼女の書いた本の中にこんな話が載っています。六十代後半の女性の方が脳外科病棟に入院されました。悪性脳腫瘍の手術を受ける予定になっていたのですが、手術が怖くてパニックになり「死ぬのが怖い、死ぬのが怖い」と叫んでいました。そんな時、適当な言葉をいっても説得力がありません。そこで沼野さんは「私は復活であり、命である。私を信じる者は、死んでも生きる。生きていて私を信じる者は誰も、決して死ぬことはない」(ヨハネ 11:25)という聖書の言葉を伝えると、その患者さんの心に「決して死ぬことはない」という言葉がすっと入ったというのです。そして叫びはびたっと止まりました。彼女は初めて聖書の言葉を聞いたのですが、心に深く残ったこの言葉についてもっと深く知りたいと思い、死んでも生きることができる世界に関心を持ち、聖書を学び、洗礼を受けました。手術を受けましたが、悪性腫瘍を全部取り除くことが出来ず、いよいよ旅立つ日が近づいてきた日、その方はこう言われました。「初めて聖書の言葉を聞いた時、決して死ぬことはないという言葉はいい言葉だなと思いました。しかし今は、イエス様のこの言葉は、本当に本当だと思えるようになりました。イエス様を信じている私は、たとえ死ぬことがあっても生きることができる、私は永遠の命で生かされていますから。」

悪魔は人間の神に対する信仰は死に、人間はもう死んだのだ、私が破壊し土に返してやったのだ、もう手遅れだと言います。しかし、キリストは違うと言います。人間は死んではいない、ただ眠っているだけだ、私が起こしに行くといわれます。そしてキリスト神は人間を起こされます。神に対する信仰を眠りから起こし、肉体も土から起こします。「主よ、あなたが造られた人間は何と素晴らしいのでしょうか。ご覧ください。死んでいた私が信仰しています。神の名を呼んでいます。」悪魔はキリストに敗北しました。人間が信仰を持ったからです。人間と神の交わりが再び始まったからです。

「死」とは何でしょう。この世との関係が終わり、人と人との関係が終わる事です。死は命から一番遠い所にあります。つまり神から遠く離れることであり、命の神との交わりが断たれることです。しかしここでは、イエス様の方から私たちとの関係を結ぼうとされています。12年間病気で苦しんだ女性とも、病気が治ったからといって交わりを終わらせたくなかった。ヤイロともそうです。娘がなくなればもうイエス様は用済みです。しかしイエス様の方から私と関係を持ち続けなさい、と言われます。その為に死んだ娘を生き返らせます。信仰とは「神キリストとの交わり」です。神と交わる人は死んでも生きるし、生きていて神と交わる人は死なないのです。「恐れることはない。ただ信じなさい。」とは、「あなたと

永遠に交わりたい」というイエス様の愛を信じなさいということです。私たちもイエス様の思いを信じ、イエス様に手を伸ばし、その手に触れ、生き続けましょう。